

探訪 北の風景 113

石狩の油田 石狩市

青木和弘

石狩市には石狩油田、厚田油田と、札幌市にまたがる茨戸（ばらと）油田があった。茨戸油田では1971（昭和46）年まで石油と天然ガスの採掘が行われていた。

3つの油田の起源は同じで、1000万年以上前に海底に堆積したプランクトンの死骸を含む「厚田層」で石油が生成され、比重が軽い石油がその上の砂でできた地層である「盤の沢層」の中を上昇したが、その上に褶曲（しゅうきよく）して硬く緻密な「望来層」が被さったので石油が貯（た）まったという。

石狩の油田は、1858（安政5）年、幕府の役人荒井金助が、厚田望来（もうらい）の海浜に石油が湧き出ることを知り、部下に調査させ、山中に油田を発見したのが始まり。しかし、当時の



技術では採掘に至らなかった。

北海道で初めて機械掘りで試掘に成功したのは1903（明治36）年、米国資本のインターナショナル石油（株）だ。現在の石狩市五の沢の深度327メートルほどで、「猛烈なガス噴出の大音響（略）応急策として下流に害をおよぼさないよう、溪流をせき止め、坑口制限装置を取り付け、急ぎ買い集めた酒だる2000石分に貯留することとした」（『本邦油田興亡史』長誠次著、1970年）とある。1石は約180リットルである。この五の沢地区1号井の噴出から北海道の原油生産量が国の鉱業統計に記録されるようになった。

石狩油田跡と厚田油田跡では、いまでも微量のガスや原油がにじみ出る油井（ゆせい）跡を見ることができ。

最初に向かったのは石狩油田跡。グーグルマップで検索すると、「八の沢小学校跡」と表示された場所に同小学校の校門だけが残し、隣に八の沢鉱業所の記念碑がある。これは、2000（平成12）年に、元従業員や元住民らでつくる「八の沢石油友の会」が、「石狩油田の歴史を永く伝えたい」と建立したものだ。

そこからさらに400メートルほど進むと、駐車スペースがあり、左手に踏み跡があつて30メートルほど行くと、石油の匂いが漂い「火気厳禁」の立て札と、ガスがブツブツと音を立てる油だまりがあつた。一帯は緑に包まれウグイスがさえずるのどかな山中である。



石狩油田八の沢鉱業所碑や小学校の校門のある場所から400mほど行くと駐車スペースがあり、その左側に草を分け入った踏み跡があるので30mほど行くと石油のにおいがして、「立入禁止 火気厳禁」の立札と、ガスがわき出る油だまりがある。油井跡である

石狩油田の最盛期は昭和初期。1929（昭和4）年に油井数188抗、年間産油量は1万キロリットルを超えた。当時、従業員と家族250人ほどがここに暮らしていた。

次に向かったのは厚田油田跡だ。1931（昭和6）年の試掘から生産が始まり、30年間操業した。これもグーグルマップで位置が正確に分かる。茨戸油田は戦後の1957（昭和32）年に開坑し、1971年廃鉱。この間に石油と天然ガスを採掘した。残念ながら、ここは民有地で、油井跡や施設などの産業遺構を見に立ち入ることはできない。

1911（明治44）年、石狩油田などを買収した日本石油（株）は、この年、函館本線軽川駅（現手稲駅）前に北海道製油所を建設し、翌年には創業している。1915（大正4）年には「石狩鉱場」（八の沢鉱業所）を設置。この八の沢鉱業所の原



厚田油田跡は、国道231号と並行する海側の道を行くと海岸に出る細い道があり、それを140mぐらい進むとある。埋め込まれた構造物の周囲からガスがブツブツとわき、黒と赤さび色の油だまりが広がっている

階段を登って右手に石狩油田八の沢鉱業所碑があり、左手に八の沢小学校の校門が残っている



厚田油田の油井跡、いまもわずかにガスがわき出て微量の原油がたまっている。残された構造物が見える

油は軽川まで口径52・9×67・9ミリのパイプラインで運ぶのだが、1928（昭和3）年になると、石狩川の両岸に高さ25メートルの鉄塔を建て、パイプラインを水面から15メートル以上の高さにつけて渡した。八の沢と軽川の高低差を利用して全長で約30キロメートルのパイプラインで流した。戦時体制下の1941（昭和16）年、日本石油は、国策会社「帝国石油」となり操業を続けていた。1945年7月15日、石狩町（当時）は米国海軍の艦載機30機以上による空襲を受け13人が死亡した。手稲町（当時）の攻撃目標は軽川駅前の製油所で、貨物ヤードには大型4基を含めて大小15基の石油タンクが建ち、大量のドラム缶が充てんされたまま野積みになっていた。それが狙われた。どういふわけか、石狩や厚田の油田は攻撃を免れていた。石狩の油田の最盛期には、北海道の石油需要をほぼ賄っていたという。